

平成27年度伊丹市立松崎中学校 自己評価

1 校訓

盡己

2 学校教育目標

すべてのことに全力で取り組む生徒の育成

3 本年度の経営方針

校訓「盡己」の具現化をめざして、授業、行事、部活動を教育活動の3本柱とし、「一生懸命勉強する」「優しい心を持つ」「感動する」生徒を育成する

4 自己評価結果

目標	アンケート番号			評価の観点	評価項目	取組と成果	各観点の評価	目標達成度	課題・改善方針
	生徒	保護者	教職員						
「一生懸命勉強する」生徒の育成	④～⑥	②～④	④～⑥	①学力が身につく授業実践	教員の授業力向上	・意図的、計画的に生徒指導が機能する「ペア・グループ学習」を授業に取り入れ、生徒が学び合い、つながり合う活動ができる授業づくりを行った。	2		<ul style="list-style-type: none"> 「授業が楽しくわかりやすい」と回答した生徒が72%(昨年度68%)、「学力向上のために授業の工夫をしている」と回答した保護者が80%(昨年度76%)で、それぞれ4ポイント増加している。しかし、学年別生徒では1年生が83%、2年生が59%(昨年度73%)、3年生が75%(昨年度74%)で、特に2年生が14ポイントも減少しており、教えるプロとして反省しなければならない結果である。生徒指導が機能する授業実践からかけ離れた旧態依然とした一方通行の講義型授業から脱却しなければならない。 本時の目標達成のための手立て(工夫)がその教師ならではのものに未だっていない。他の教師の授業を観たり、研究会に積極的に参加して、自分の授業に新しいものを取り入れる姿勢と意欲が必要である。 市内教科部会で学力調査結果の分析を行い、授業改善策を冊子にまとめていることが校内で十分活かされていない。校内教科部会の計画的、効果的な運営方法を具体化する必要がある(校内教科部会の定例化)。
					計画性を持った研修の実施	・校内研究会を学期に1回行い、研究授業後に生徒と教師の言動をとらえた授業評価を行う(鑑識眼)とともに、教師自らの授業力向上に向けた事後研究会が実施できた。 ・定期的に若手教員研修会を実施し、合唱指導法や通知表所見の書き方などについて教師力アップを行った。			
					生徒指導が機能する授業実践	・「ペア・グループ学習」を取り入れ、その中で生徒指導の三機能(自己存在感、共感的人間関係、自己決定)に視点を置いた教師独自の手立て(工夫)を明記した指導案を作成し、全ての教師が1回公開授業を行った。 ・全国学力調査、伊丹市学習到達度調査において、昨年度の平均値を上回り、また全国平均値を全ての教科で上回った。			
	⑦	⑤		②読書活動	図書室の整備	・書架が増え、本を探しやすくなった。 ・図書部長が返却BOXを設置し、図書返却が容易になった。	3		<ul style="list-style-type: none"> 「朝読書や図書室の利用など読書に力を入れている」と回答した生徒は78%で、まだまだ十分とはいえない。これは、学校司書が勤務している週のみ開館していることが原因であり、教師による開館割り当て、委員会活動の活性化等、何らかの手立てを打つ必要がある。 生徒会専門委員会の活性化に向けた、教師の積極的な取組が必要である。 授業で計画的に図書室の活用を行う必要がある。
					読書量の向上	・学校司書が定期的に新刊紹介を発行したり、図書館祭りを開催して、生徒に図書室の利用と併せて読書啓発を行った。 ・1年生で集団読書に取り組み、読書力の向上がみられた。 ・図書貸出冊数…6,314冊(4～12月)、10冊/1人(前年2,370冊、4冊/1人) ・読書冊数…14,168冊(4～12月)、21冊/1人(前年17,539冊、28冊/1人)			
	⑬⑭	⑩⑪	⑩	③進路指導	進路指導体制の充実	・新通学区域による公立高校入学選抜が2年目を迎え、旧伊丹学区外の進路状況をデータ化して、生徒の希望を踏まえた適正な進路指導を行った。	3		<ul style="list-style-type: none"> 公立高校入学選抜における新通学区域に関する情報を3学年教員だけでなく、全ての教員が持ち、1年生から系統的な進路指導ができるようにしなければならない。 「進路に関する情報提供や指導をしてくれる」と回答した生徒が83%、保護者が75%であり、保護者への情報提供が進路説明会のみになっている状況である。学年通信で学年段階に応じた進路情報を定期的に提供する必要があります。
					生徒・保護者への情報提供	・3年生に対して29回にわたる進路通信を発行し、また全校生徒に対しては学校だよりで、より正確な新しい進路情報を発信することができた。			
		④		④学習タイム	系統的・継続した実施	・今年度から授業での学習内容に即した確認テストを実施し、基礎的・基本的事項の定着をはかった。	3		・学習指導要領で示されている「振り返り学習」としての確認テストしっかりとすること、授業の一環として教師が意識して取り組む必要がある。

目標	アンケート番号			評価の観点	評価項目	取組と成果	各観点の評価	目標達成度	課題・改善方針
	生徒	保護者	教職員						
「優しい心を持つ」「感動する」生徒の育成				①部活動	部活動の活性化 部活動をとおしての仲間づくり	<ul style="list-style-type: none"> 部活動数19は市内最多であり、活発に活動している。 阪神大会出場17、県大会出場9、近畿大会出場3、全国大会出場1と好成績を残した。 毎週月曜日と月2回(土・日)をノー部活デーに設定して、適度な休養を設け、けがの防止や効率的な体力向上に努めた。 生徒下足場廊下に部活動実績を紹介するコーナーを設けて、広く活動状況を広報した。 入部率84%で、日常の活動だけでなく、地域行事に参加するなど、地域の小学生や大人との交流ができた。 	4	<ul style="list-style-type: none"> ノー部活デーの日に家庭での手伝いや家庭学習に取り組む啓発等を家庭と協力して行う必要がある。 部活動での取り組み姿勢が授業や行事でプラス面で発揮できるよう、技術指導だけでなく、人間形成の部分での指導が必要である。 お互いが高め合える集団としての活動を計画的、系統的に行う必要がある。 自己存在感を育てる場面設定を行う必要がある。 	
	③	③⑯	③	②学校行事	生徒の自己存在感、充実感、達成感の育成	<ul style="list-style-type: none"> 「からだで歌って、歩ける松中生」をめざし、生徒と教師が一体となって、学校行事に取り組むことができた。 行事に向けた練習で、教師が生徒と一緒に汗を流し、一種の競争意識を持って指導することができ、達成感、満足感を得ることができた。 「学校行事が楽しい」と回答した生徒が92%(前年度92%)、「子どもが学校行事に積極的に参加している」と回答した保護者が96%(前年度97%)であり、2年続きで多くの生徒が行事に前向きに取り組んでいる。 	4	<ul style="list-style-type: none"> 全ての教師が授業研究と一体となって生徒指導の三機能に視点を置いた行事に取り組むことが最も大切である。 これまでの教師の意図的な取り組み姿勢がマンネリ化している状況がある。 	
	⑩⑪	⑦⑧	⑦⑧	③生徒指導	生徒指導体制の整備 いじめ、問題行動への迅速な対応 不登校への計画的な対応 家庭との連携	<ul style="list-style-type: none"> 週1回の生徒指導委員会を定例化し、情報共有をしながら、適時性を欠くことなく指導・対応を行うことができた。 いじめアンケート調査を年5回実施し、実態把握を行い、早期発見・早期対応を行った。 いじめ防止週間を年2回設定し、教育相談の実施、生徒会による全校的な取組を行った。 生徒指導委員会での情報交換をもとに、一人ひとりの態様に応じて別室指導、面談、家庭訪問等を行うとともに、必要に応じて、行政や関係機関と連携した対応を行った。 長期欠席者数23人(H27.12末現在)前年度同時期17人 家庭訪問、学校での面談等を行い、保護者と連携した対応を行った。 	3	<ul style="list-style-type: none"> 「学校の決まりについて公平に指導している」と回答した生徒が79%、「決まりや社会のルール、マナーについて指導している」と回答した教師が100%であり、生徒と教師の意識の差がある。 「学校は一貫した生徒指導を行っている」と回答した保護者が81%、「問題行動に対する指導体制が整備されている」と回答した教師が96%であり、生徒と同様、教師との意識の差がある。 教師は常に生徒や保護者の声に敏感でなければならない。またその声に対して具体的などのような改善策をしなければならぬかを授業、生活面で実践する必要がある。何も起こらないから例年取りはだめである。 組織的な対応が不十分なところがあり、対応が後手後手に回り、問題を複雑化させてしまうことがある。危機管理意識を常に持って生徒指導を進める必要がある。 長期欠席者の増加は小学校時からの改善がみられない生徒が多いたことによるためであり、小学校とのより緊密な連携が必要である。 「問題行動には汗をかく」「不登校には足を使う」を実践する。 	
	⑫	⑨	⑨⑩	④教育相談	生徒理解のための取組 スクールカウンセラーとの連携	<ul style="list-style-type: none"> 学期に1回教育相談週間を設定し、生徒の状況把握を行った。 いじめ防止週間と教育相談週間を同一週に設定し、全校体制による生徒理解を行った。 生徒や保護者のカウンセリング、教師のコンサルテーションを週1回の訪問日に行い、適切な助言を受けることができた。 	3	<ul style="list-style-type: none"> 「先生は生徒の悩みや不安に対して相談のにつてくれる」と回答した生徒が78%(前年度74%)、「学校に子どものことについて相談できる先生がいる」と回答した保護者が71%(前年度64%)、「悩みや不安をかかえている生徒の相談のにつている」と回答した教師が96%(前年度89%)である。教師の認識のズレが課題である。待ちの姿勢ではなく、授業の中で生徒の状況把握ができる「教えるプロの眼」を鍛える必要がある。 スクールカウンセラーから定期的な生徒・保護者への発信が必要である。 月1回のスクールカウンセラーと教師との連絡会を実施する。 	
			⑮⑯	⑤特別支援教育	指導体制の確立 個別の指導計画の作成	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援教育コーディネーターを中心に特別支援教育推進委員会を定期的に開催し、支援内容の検討等、適正な就学指導を行った。 特別支援教育支援員が普通学級での支援を要する生徒に対して計画的な支援を行い、支援状況を毎日学級担任に活動報告として伝え、学級指導に活用した。 特別支援学級の生徒、普通学級における支援を要する生徒について個別の指導計画を作成した。 	3	<ul style="list-style-type: none"> 個別の指導計画を学年会、校内研修会で活用し、共通理解を図るとともに、個別の教育支援計画の作成を進める。 普通学級における支援対象生徒の個別の教育支援計画を作成する必要がある。 特別支援教育支援員の支援状況を学級担任が把握し、学級での指導や保護者との連携に活かす必要がある。 	
				⑥生徒会活動	生徒会活動の活性化	<ul style="list-style-type: none"> 体育大会での大会スローガン、生徒会種目、応援など、生徒会が中心となった活動が活発になってきて、生徒の参画意識が高まった。 文化発表会で生徒会の取組を発表し、全校生徒参加に向けて啓発を行った。 毎朝、生徒会役員による挨拶運動、校歌の放送、国旗・市旗・校旗の掲揚を行った。 いじめ防止週間「グリーディングカップ」「魔法の言葉週間」を実施し、生徒が主体となった取組を進めることができた。 	3	<ul style="list-style-type: none"> 組織的な生徒会活動ができてつがあるが、各学級、各委員会と生徒会本部がより太いパイプでつながった活動に発展させる必要がある。 生徒が主体的に活動できるよう教師の柔軟な発想、効果的な支援が必要である。 	
	⑯	⑬	⑬	⑦健全な食生活	早寝・早起き・朝ごはんへの取組	<ul style="list-style-type: none"> 横断幕を作成し、生徒、保護者、市民へ啓発を行った(すこやかネットまつぎ)。 教科指導において、偏りなく栄養摂取ができるバランスのよい食事について食育指導を行った。 	3	<ul style="list-style-type: none"> 朝食を毎日食べている生徒が82.8%(前年度80.9%)、あまり食べていないまたは全く食べていない生徒が6.4%(前年度8.2%)で、改善傾向にあるが、90%以上をめざしてPTAと連携した取組を進めたい。 	

目標	アンケート番号			評価の観点	評価項目	取組と成果	各観点の評価	目標達成度	課題・改善方策
	生徒	保護者	教職員						
開かれた・信頼される学校づくり	①	①	①②	①学校評議員制度	学校経営への意見反映	・学校評議員会、学校関係者評価委員会を開催し、学校評価結果をもとに、様々な意見をいただいた。	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ・学校評議員、学校関係者評価委員の意見をより一層学校運営に反映するため、学校運営協議会制度(コミュニティ・スクール)を取り入れ、2つの委員会を一本化して円滑な学校運営を行う。 ・学校評価、アンケート調査結果をふまえて、次年度の学校経営方針をはじめ、各分掌の方針・計画を今年度中に協議・決定する。 ・教師が各自の分掌、担任(教科・学級)、部活顧問等における課題を明らかにして、次年度に具体的な改善策を3学期中に明確しておく必要がある。 ・土曜オープンスクール時に学校行事のビデオを放映するなど、行事に参加できなかった保護者、地域の方へ新たな形で情報発信をする。 ・地域行事へ参加していると回答した生徒が25%(前年度28%)で、この3年間低い状況である。オープンスクール等の情報発信とあわせて、地域行事で生徒が活動できる場づくりを意図的に設定する必要がある。 ・学年通信で発信している内容をHPでも公開するなど、月2回以上はHPを更新する。
				②学校評価	PDCAサイクルの実行	・学校評価資料としてのアンケート調査を11月に実施し、各項目で肯定的な回答が昨年度を上回った。授業、行事、部活動に取り組む教師の姿勢の変革が少しではあるが、生徒・保護者に評価されてきたと言える。	3		
				③保護者・地域との連携	地域への公開、参観授業の実施	・学期1回の土曜オープンスクールが定着してきた。	3		
		⑮⑲	⑳～㉓		生徒、教師の地域行事への参加	・部活動生徒を中心に地域行事への参加を積極的に行った。			
					学校からの情報発信	・学年通信、学校だよりを定期的に発行し、学校情報の発信を行った。 ・校区内3小学校区会長会、理事会に管理職が毎月出席し、学校教育活動に関する情報提供を行うとともに、地域の意見聴取、地域の情報共有ができた。			

※ 項目の評定については、生徒、保護者、教師のアンケート結果等から判断し評価する
(4:達成されている 3:ほぼ達成されている 2:あまり達成されていない 1:達成されていない)

4 自己評価における特記事項